

謡曲文學の側面觀

著者	高木, 敏雄
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 0 0
ページ	2 2 - 3 5
発行年	1903-06-25
その他の言語のタイトル	謡曲文学の側面觀 曲文學の側面觀
URL	http://hdl.handle.net/2298/5641

曲文學の側面觀

教授 高 木 敏 雄

此の一篇わ、謠曲の中に見ゆる、種々雜多の說話傳説をば、互に比較して、その類似の點より、試に分類して見たものである。分類の方法が、論理的でないといふ點からして、或わ多少の非難が、あるかもしれぬ。この中には、或わ說話の性質上から、觀察した者もあり、その内容上から比較した者もあり、或わ傳説の系統上から、分類したものもあるし、或わまた、國民の信仰、時代の迷信などといふ點から、見た者もある。分類の論理的嚴正、統一的完全などわ、要するに、最初から、この篇の目的でわ、ないのである。はじめから、種々雜多の方面から、觀察し、比較したものであれば、分類の論理的嚴正を缺ぎ、統一的完全を具へて居らぬのわ、もとより當然の結果であるので、却て、その論理的でない、統一的でないところに、多くの利益が、存じて居るでわ、あるまいかと、甚だ自分勝手な理窟を、述ぶる様でわあるが、實の筈かに、信じて居る。

一方面からばかりの觀察わ、却て事物の真相を、誤り易い。觀察點愈多くなれば、從てこの缺點は遠かりて、智識を得ること益々多い。兎も角も、觀察の誤謬に陥らぬ様に勉むるのが、肝要の事である。この篇に於ても、この點にわ、多少力を盡してある積り。

謠曲わ、足利

の代表者である、その以前の、貴族的文學に對して、觀察すれば、一個の平

文學、

その

うにば、佛臭ひ宗教文學、またその愛稽者、

張、

上の文學である。兎も角も、平凡

文學の粹の粹とも、云べきものに相違ない。従て謡曲の研究は、足利文學の研究者、極言すれば、足利の此の篇の目的以外であるから。茲に云ねぬ、平凡單調、非原造的。「エビゴオチン」の遊戲と云のわ、或一面からの觀察で、この數語で、謡田の性質價值を、云盡したのでわ、勿論ない。謡曲の性質が、文藝の趣味ある社會の、「レクチュウル」たる所にあるか、或わ單に、能樂の「チキヌト」たる所に存して居るか、文學としての謡曲の價值が、純粹の詩的方面に存するか、或はまた、國民の文學史的方面に存するか、この位の疑問に答ゆるのわ、至極容易なことではあるが、矢張り吾々の領分外であるから、暫く云ねぬ。謡曲は芽出度いもの、龍南會雜誌の第百號の、芽出度い冊子に、堅くるしい理窟を、並へるのわ、聊かその當を得ないのに近いので、暫く云ねぬ。未だ云ふ可き時期に達せぬのである。

兎も角も、龍南會雜誌第百號の、芽出度い冊子、謡曲の、芽出度いもの、その中に見ゆる説語傳説すればかりに關した、研究の一端、極々の端緒を、短いこの一篇に書いて見た。國文學史以外の方面から、國民の文獻學に、多少の貢獻するところがあれば、此篇の目的のわ、十分に達せられる。短いこの一篇のわ、更に短い次の四章に分れる。

第一章

人情物語

第二章

時代説話

第三章

國民信仰の形跡、神仙説話と天狗説話

第四章

神祇能と佛法能

第一章

人情物語

謠曲の材料多い中に、最も多數を占めて居るのわ、人情を種とした物語である。尤もこの中にも、色々な區別があつて。親子の愛情を種とするものもあれば。兩性の間のそれを、種とするものもある。そしてまた、この後のものに於ても、二の區別がある。その間に既に、夫妻の關係の成立しているものと、まだ其處まで行かぬのと。この種類の物語の特色わ、離別、もしくは再會、或わ離別と再會との二つ、必ずその何れかを、説話の骨子としてゐる。これがその最大多數の特色である。これわ、交通が不便で、社會の秩序が整わず、身軀生命の安全も、從て十分に保護せられ得なかつた、その當時の時代の反射として、觀察すべきもので、斯様な事變が、如何ばかり、當世の人心に、偉大な刺戟を與へたか、大抵推量することが出来る。離別は誠に悲しい、再會は如何にも嬉しい。詩人が斯様な事柄を種として、人情物語を作爲して、夫が人心を動かしたのである。

明治の今日に於ては、離別もしくは再會のあわれな記事が、新聞紙上に掲げられるのを見るのわ、決して甚だ罕でわない。そして數百年以前の社會に於ては、以上述べた様な事柄わ、甚だ屢ば起つたのである。であるから、謠曲の人情物語わ、眞の時代の反映であつて、決して詩人の空想でわない、所謂「ヒルングスヒンスト」でわない、と云ことを了解してもらいたい。

序に今一言述べておきたいのわ、再會の成立と不成立、尙委しく云へば、再會に續いて認識の生ず

ると生ぜぬと、その早いと遅いと、完全なると不完全なると、これわ、人情物語の中でも、最も感動を惹起し易い轉化の一であつて、各國民の文學上、その例極めて夥しい。手近い例を舉ぐれば、各地の寄席などで、今に盛んに語られ、盛んに聞かれる「御所櫻」三段目辨慶上使の段、年若い母が、主君の身代りに立つ爲に、恐しい荒武者に殺されると云、悲慘の場である。子を殺された母の愁嘆わ、誠に此上もなく、聽者の心を動かすのであるが、夫が何故に悲しいかと尋ねると、吾目の前で最愛の子が、殺されたと云譯ばかりでわれない。眞の父に殺されたと云譯ばかりでも、勿論ない。十七年の永い間。父を尋ねた甲斐あつて、廻り會わせわ、したものの、まことの父と云ことを、知らずに死んだ娘の身の上、それが實にかわいものである。夫がかわいさに、母が嘆くのである。それが聽者を、泣かするのである。簡單に云へば。再會に續く認識の不完全、殺された方から云へば、認識の不成立、夫がまことに悲しいのである。盲目の悲しさわ、尋ねる人にめぐり會いながら、知らずに別れた。朝顔の嘆、吾子と知つて名乗り得ぬ、子供巡禮の母、何れもこの例。

德文學最古の遺品「ヒルデブラントの歌」に於ける親子の合戦、ソフオクレエスの劇詩に見ゆる、エディプスの不幸、廣く探せば、苟くも人類の擴がる限り、人文の存する限り、何れの國土に於ても、凡ての國民、凡ての時代を通じて、その例は無數である。唯一と口に、人情物語と云つたばかりでわ、別に深い意味もなく、趣味もなく、文學上研究の價値もない様に見えるので、一向に輕蔑して、ア、また例の、何だ、つまらぬ、陳腐極まる、などと極めて冷やかに、一笑に附し去る流弊の人々もあるが、決して實わ然らずだ。勿論、人間の情と云ふ者わ、人類を通して、普遍的のもの

に相違ない。それだからしてこそ、心理學なども一個の學問として、成立して居る。時の古今、國の東西、階級の上下を通じて、同一であるのわ、恰かも、水の底さに就くが如きものである。同じ水であるが、懸つて瀑となり、湛いて海となり、流れて河となり、飛で沫となり、その變化千態萬狀、その愛すべき、恐るべき、光景の變化わ、如何に騷人の錦心繡腸を動かしたるよ。誰か水の景を陳腐と云ひ、平凡と云ひ、ア、また例のと冷笑し去るものある。兩性間の愛、また親子骨肉の愛、その根底に於てわ、即ちその活動せぬ、潛伏靜止の狀態に於てわ、固より古今の差なく、東西の別なく、もとより貴賤上下の隔ある可からずだが、併しながら、その一度び物に觸れ、事に應じて、外に現わるところ場合に於てわ、その活動の形式に於て、東西古今の差異も生じ、貴賤上下の區別も生ずるので、同じく人情を種とする物語に於ても、その發生の時代により。その趣向、その構成に於て、必ず多少の相違なくてわならぬ。これ等のことを研究するのわ、中々興味の多いことであつて。歐羅巴あたりの學者、特に「フォルクロアリスト」あとの中にわ、間々種々の國民に亘りて、此種の物語を蒐集して、この方面からして、比較研究すると云様なことも、隨分行われて居る様であるが、片輪的の人文が、著しく文献學の發達に、反對に與つて力を致してゐる、現下の日本に於てわ、自分の寡聞かわしらが、殘念ながら、この種類の研究わ、殆んど行われてない。少しく慷慨家的の口吻でわあるが、これこそ眞に、昭代の大缺點である。この一篇によりて。此邊に對して、少しく讀者の注意を喚び起したのであるが、今日の有様でわ、當分恐らく

何を不平らしく。此の冊子にわ、不平的口調わ禁物であるのに。そこで、再び以前に立返りて、

矛盾度い話曲の中に見ゆる、人情物語の分類をやつて見ると、大略次の通り。話曲文學の性質として、その中に見ゆる人情物語の、極めて單調で、その形式の變化の甚た乏しいのわ、當然の結果である、所謂人情物語に於て、

(一) 説話のに現われてゐる、人物の側から觀察すれば、

イ、親と子どもの間に關するもの、この中で、

甲、父と子どもの間に關するもの、

乙、父と娘との間に關するもの、

丙、母と子どもの間に關するもの、

丁、母と娘との間に關するもの、

ロ、兩性の方に關するもの、この中で、

甲、夫妻の關係既に存するもの、

乙、夫妻の關係の未だ存せぬもの、

(二) 次に説話の骨子の上から觀察すれば、

イ、親子の部に於てわ、

甲、離別に再會の續くもの、

乙、單に離別を主するもの、この中で、

イ、生別の悲を主とするもの、

ろ、死別の嘆を主とするもの、

丙、死者に對しての追慕悲嘆を主とするもの、

丁、愛情の勝利を主とするもの、

ロ、両性の部に於てわ

甲、離別に再會の續くもの、所謂別又逢もの、

乙、離別の悲嘆のみを主とするもの、この中で

い、生別の悲み、

ろ、死別の嘆み、

丙、愛の不成立と題目とするもの、所謂不遂戀、

い、双方に愛情の存する場合、

ろ、一方にのみ愛情の存する場合、

丁、愛情の勝利を主題とするもの、

戊、失望の愛情、

己、身を獻げる愛情、

庚、情誼の爲めに、身を殺すに至るもの、

辛、追慕の悲嘆を主とするもの、

壬、愛情の結果としての嫉妬もしくは執心、

癸、愛情の不滅、

ハ、兄弟の間に關するもの、

(三) 説話の出處から觀察すれば、

イ、歴史的物語の中から出たるもの、この中で

甲、説話の起原が、支那にあるもの、

乙、其起原が日本にあるもの、

ロ、古代からの口碑傳説から出たるもの、

ハ、舊い歌物語、草子類から出たるもの、

ニ、時代の迷信を種として、作者が作つたるもの、

ホ、或主張の爲めに、作者が作つたるもの、この中で、

甲、佛法の功德を稱揚せんが爲め、

乙、作者の崇拜する人物の爲め、この中で、

イ、「伊勢物語」の作者在原業平、

ロ、「源氏物語」の作者紫式部、

ハ、和歌に巧であつた小野小町、

丙、和歌の徳を述べん爲め、作者が作つたるもの、

萬曲の出来ぬ時代が、佛法の信仰の極盛であつたからばかりでない、この作者が、大抵佛學を修

め、佛法を信仰して居た結果、謡曲の全部に、佛教思想が充ち満ちて居る。此は謡曲文學の特色の一であつて、數百の曲の中で、殆ど佛教趣味を帶びて居らぬと云ても、差支ないのわ、恐らく祝言能と名づけたる「鶴龜」の一曲位なもの、夫を除いてわ、他に殆どその例がない。凡ての曲わ、佛法の功德を述べん爲めに、作らせたと云ても、少しく極端かわ知らぬが、先づ差支わない。この事わ、別に説明の必要もないとして、最後の二點に就て、其例を擧ぐれば、和歌の功德を述ぶるものゝ中にわ、

「蟻通」 「墨染櫻」 「小鹽」 「杜若」

「雲林院」 「檜垣」 「西行」 「白樂天」

「西行櫻」 「六浦」 「熊野」 「忠度」 「梅」

「芳野」 「俊成忠度」

なごをはじめてして、曲中に業平、西行などの現わるゝ例わ、少くない。次に

「伊勢物語」から出たものわ、

「井筒」

であるが、曲中に、文辭の裝飾として、業平の歌を引てある例も、甚だ多い。次に

小野小町に關するものは

「通小町」 「關寺小町」 「鸚鵡小町」 「草紙洗小町」

で、最後に、式部の草紙から、材料を取つたもの、所謂源氏物語に、次のものがある。

「野宮」 「玉鬘」 「浮船」 「半暮」 「住吉詣」 「夕顔」 「御衣上」 「空響」

「落葉」 「碁」

さて、はじめに立返つて、人情物語の中から、その例を擧ぐると、

(一) 親子の部に於て、

イ、離別に再會の伴れものにわ、

「景清」 「百萬」 「飛鳥川」 「雲雀山」

「隅田川」 「花月」 「隱岐院」 「丹後物狂」

「櫻川」 「土車」 「寵祇王」 「歌占」

「柏崎」 「弱法師」 「木賊」 「荊萱」

「水無瀬」 「玉葛」 「大佛供養」 「藍染川」

ロ、單に離別を云ものにわ、

「唐船」 「小袖曾我」 「朝長」 「谷行」

「知章」 「大佛供養」

ハ、追慕の悲の例にわ、

「藤戸」 「松山鏡」 「生田敦盛」 「天鼓」

ニ、愛情の勝利を、主とするものにわ、

「荊萱」 「水無瀬」 「二度掛」 「小袖曾我」

「海士」 「土車」 「唐船」 「熊野」

「正儀世守」

ホ、繼母物語にわ、

「月雪」 「雲雀山」 「藍染川」

繼母物語わ、人情説話中、別に一個獨立の形式を有し、特殊の價值を、有するものである。大抵、はじめに虐待された子が、後に至つて、幸福を享くると云のが、普通の形式で、日本民間の童話中にも、此種に屬する物語わ、澤山であるが、大抵同様の結果に終つてゐる。日本ばかりでわない、外國にも、その例が多いので、試に獨逸の童話から、一二の例を舉ぐると、グリムスの蒐集した童話集の中で、「森の三人」、「アッシエンブッテル」、「フラウホルレ」、「白雪姫」などが、その好例である。

離別に再會の續く説話に於てわ、離別の原因、再會の事情、認識の成不成など、千差萬別であるが、試に、右に舉げた多くの例の中から、一つを擧ぐれば、最も研究の價值あるものわ、歴史物とも云ふべき「景清」である。平家の武者悪七兵衛景清政治上の或原因によつて、源氏に悪まれて、日向に流され、盲目となつて、乞食の生活をして居る。鎌倉に残された景清が女人丸、父を尋ねて、日向に行く。乞食に逢て、吾父である云事をしらず、父の在所を尋ねたが、景清わ、恥かしいと云ので、自分がその尋ねる父であるとの事を、かくして云わぬ。里人の教によつて、はじめて夫が分つた、と云のが、物語の大意。さてこの場合に於てわ、離別の原因わ、政治上の變動、認識の縁わ、里人

の親類である。

景清が明を失て、琵琶法師になつたと云つた、昔から、色々の稗史小説類に、書載せであつて、有名な一つの説話になつてゐるが、もしこれが正史上の事實であるとすれば、別に何も云事わない。併しながら、事實として、甚だ疑わしいので、既に日本文獻學史の初頁の偉人として、吾々が尊敬する馬琴も、其著「玄同放言」に於て、この事を論じて居る。馬琴の説によると、景清が目を剔挑つたと云事わ、「東鏡」に見ゆる、上総五郎兵衛忠光が事から、出たと云のわ、一を知つて二を知らぬ説で、實わ、燕の高漸離が故事から、出たのである。此わ「史記」の刺客列傳二十六に出てゐる。又「臥雲日傳錄」の文安五年八月十九日の條に、覺一の弟子に、四人の檢校があつて、其中の二人の名わ、景一と清一としてある。景清が琵琶法師になつたと云のわ、これから生じたのである。馬琴の説わ、如何にも尤らしい説で、正史上の事實問題が、決せぬ間わ、暫く一個の意見として、馬琴の説を承認せねばならぬ。その外、一つ一つの説話に立入つて、論ずる段になると、云べき事わ限りもないが、本篇の目的でわないので、夫等の事わ、他日に譲り、次に

(二)兩性の都に於て、

イ、離別に再會の續く例にわ、

「班女」 「花筐」 「蘆荊」 「加茂物狂」 「舞車」 「野宮」 「住吉詣」

「水無瀬祓」

ロ、離別の悲、追慕の嘆の例にわ、

「小督」 「松風」 「求塚」 「梅枝」 「砧」 「伏木曾我」 「項羽」 「通盛」
 「清經」 「舟辨慶」 「巴」 「富士大鼓」 「鶴岡」 「女郎花」 「昭君」
 「楊貴妃」

ハ、愛情の不成立、失望の愛情の例にわ、

「道成寺」 「三山」 「船橋」 「戀重荷」 「通小町」 「求塚」 「綾歌」
 「采女」

ニ、嫉妬、執心の例にわ、

「道成寺」 「綾歌」 「野宮」 「葵上」 「落葉」 「女郎花」 「鐵輪」
 「定家」 「項羽」

ホ、情誼の爲に身を殺すもの、献身の愛情の例としてわ、

「求塚」 「吉野靜」 「浮船」 「草雉」 「籠太鼓」

ヘ、愛情の勝利、その不滅の例にわ、

「井筒」 「籠太鼓」 「女郎花」 「定家」

此部に於ても、精しい事わ、他日に譲り、唯一つ注意すべき者と、述べて置く。夫わ「船橋」に見ゆる説話である。この説話の筋と同様なのわ、著者わ詳ならぬが、「望海毎談」と云書の中にある、怒が岡の名義の由來で、シラアの詩「ヘロとレアンデル」の材料たる、希臘の説話も、その類似的著しい事わ、驚くばかり。類似と云てよいか、暗合と云てよいか、同源と考ゑて然る可きであるか、兎も角も、

校説語學上の、一個の研究問題である。

(三)兄弟の愛を作るものゝ、

「蟬丸」 「春榮」

次のものゝ、人情物語の中、右の項目の何れにも屬せぬもの、此章に於てわ、別に云べき事のない

「二人靜」 「夕顔」 「空蟬」 「基」

第一章に於てわ、云べき事わ、先づさつと此位。

文選の解題

教授本 田 弘

第一 選者及選修の年代

文選の選者は梁武帝の太子蕭統字德施諡は昭明といへる人なり。梁書第八卷昭明太子傳によると、太子は齊の中興元年九月武烈三年神武紀元一一六一を以て襄陽に生れ、天監元年生れし立て皇太子となりしも、中大通三年繼體二十五年紀元一一九一四月年僅に卅一歳にして薨せしを以て、終に帝位に上らざりき。太子天性聰敏三才の時より既に孝經論語を受け、五歳の頃は遍く五經を誦せしと云。貌姿舉止共に善くして而仁孝、普通七年、母、丁貴嬪の疾にあるや、太子は永福省に還り、朝夕疾に侍し、衣帶を解かず、体素壯腰帶十圍減削過半毎に入朝士庶見者莫く不下泣ほどなりき。性寛和容衆喜怒色に形は